

# 私と片付け

## 堀合文子

「ほら、また出しっぱなし」「文ちゃん、また出しっぱなし、いくら言ってもだめね」

母の声が今だに耳もとにひびく。勉強しなさいという声は耳に残っていないが、これだけは今だに耳の奥に残っている。自分が散らかしたという印象は自分に残っていないが、いつも叱られていたことは覚えてる。今の自分を見ても、やっぱり、と自分でも思う。

片付けることはきらいではないが、自分がやろうと思った時は、時間があるうがなかるうがやり出す。結局わがままで気まぐれの一言につきるのかもしれない。自分としても、人を見ても散らかっているのは好きではない。紙が同じ机の上のっているのも、無雑作においてあるのは好まない。紙一枚も意識しておくが、きれいにすっきり片付けてしまうのは年に何回あるかないか

で、片付けたかと思うとまたすぐ物がたまってくる。きちょう面、きれい好きだから片付けるのと、きちょう面でもきれい好きでも片付いてない場合があるようだ。

こんな私が、幼児に向かって片付けましょうとか、片付けの習慣をつけるには……と、考えるのは何か面はゆい気がするが、私は、一つの義務、仕事、教育と考えて幼児に対する方法を考えているにすぎない。

幼児の片付けの場合は、言葉で片付けましょうとか、きれいにとか言うのでなく、片付けましょう、と言いなから自分が先達になって片付けなければ身についた指導にはならない。が、幼児の場合も、即人間として考えても、常に何でも片付けてしまう人育てようというのでない。また、何か仕事や、遊びをして次の遊びに移る時は必ず道具を片付けなければという人間に育てようというでもない。また何か物が出ていたらすぐ片付けてしまう人に育てるでもない。

何でも片付けることができればよいのではないと思う。片付けること一つにも、やはり意義があって、そして必要に応じてその人が頭を働かせて行動に移す、すなわちやたらにいつもどんな時も片付ければよい子どもだとか、私の指導が徹底したと喜ぶのはおかしい。

一生懸命夢中になって何か作っている時は、下へ紙が落ちていても、また、机の上が散らかっていても、片付けるより、作ることに専念した方がよいだろう。しかし、あまり見苦しい時は、先生がちょっと拾ってあげたり、ちょっと整理してあげるのは先生の大切な心づかいであろう。また、今ここで遊んでいた、しかし今いたかと思っただけでなくなって積木など散らかっている。片付けて次の遊びに移らねば……。と片付けさせるのは、やはり幼児の気持ちや生活を理解しているとは言えない。これも、もし見苦しければ先生が見苦しくなくよせたり、まとめておけばよいだろう。ブロックでも砂場でも夢中に遊んでいるいろできていた、がおべんとうの時間になってしまった。もちろん、その場でおべんとうを食べなければならぬ所は、みんなで片付けて、きれいな所でおべんとうを食べなければならない。

が何か一つの区切りのように何でもかでも片付けなければという意識はやはり、遊びを尊重したようでもそれは幼児の生活の流れを区切っていることになると思う。この点、言葉や文字だと、では、片付けないでということになるがそこでの幼児の生活、幼児というもの、幼児の遊びというものの理解と、見る目を正しく使って、先生がその場で正しく判断する頭を必要とすることが先生の保育技術だと思ふ。

たしかに現在の幼児教育界（というとき大きい）は片付けは前より上手になったようだが、表面を整えるために片付けたり、幼児にやらせたりすることは何の意味もないし、また幼児の中に何も育たない。遊びを尊重した指導といっても、目に見えない中で幼児の自発性をつぶし形にはめた指導と何ら変わりなく、むしろそれ以上こまる結果をもたらすことになる。

幼児が、人間として将来片付けのできない人に育っても困る。また、片付け過ぎてきちよう面のようだが、人間的な味、一番大切な創造性がかくれてしまうような人でも困る。

こんな所に、「片付け」一つでも幼児教育の深さと、むすかしさが存在する。それを理論で理解しても、実践できる保育者が果たして何人いるだろうか。自分もその一人なのだが、幼児教育の深さということに、またしてもぶつかる。

現代の世の中に、口で言えぬ人間としてのゆたかさや深さ、幼児の独特の幼児らしさ、幼児期におこななければならないことと関連して、「片づけ」一つでも保育者の考慮が一つ一つ大切にたつてくる。

「片付け」をさせるべきか、「片付け」をさせないべきか、「幼児教育ではこうです」といえることはできない。その場、その場、その幼児、を考えていくほかにないと思ふ。（お茶の水幼稚園）